2-P-1

学生の主体的な学びを中心とした新たな保育士・教員養成のあり方と質保証
－常盤モデルの構築にむけて－

大森雅人
光成研一郎　牛頭哲宏　橋本好市　國崎大恩

保育士や教員を取りまく急激な社会環境の変化を受け、現在、保育士養成・教員養成のあり方が抜本的に問い直されている。さらに、大学教育の質的転換が声高に叫ばれるなか、「いま、大学で〈どのような〉専門職としての保育士・教員を〈いかに〉養成していくのか」という課題に全国の養成系大学が直面している。そこで私たちは、保育士や教員といった教育の専門職養成における効果的な主体的学びの姿を提示することによって、大学教育の質的転換にむけた新たな保育士養成・教員養成のあり方を明らかにすることを目的に研究をすすめてきた。

その結果、現在求められている保育士や教員の専門性向上という課題と大学教育の質保証という課題が必ずしも上手くかみ合うものではないことを明らかにすることができた。すなわち、急激に変化する社会環境に対応するべく保育士や教員には具体的な保育・教育技術以上に実践を反省し改善する力が求められる一方で、質保証という観点からはそうした反省し改善する力よりも技術的力量を教育することが構造的に求められてしまうということである。こうした背反性をいかに克服することができるのか、当日の発表では学生の主体的な学びを中心とした新たな保育士・教員養成のあり方という観点からこのことについて考察を深めてみたい。

2-P-2

若手教員の国語科指導における実践的力量向上に関する研究
－若手教師の協同的学びを支えるサポートシステムの構築をめざして－

山下敦子

教員の大量採用時代が続き、教員の平均年齢が低下している。文部科学省「学校教員統計調査（2013）」では、平成 25 年度における 30 歳未満の教師占有率が 15.3%となっており、平成 16 年度と比較すると 6.4 ポイント向上している。このような現状を受け、本研究では、若手教員の実践的力量向上のために必要な支援内容や支援システムを構築することを目的としている。

まず、先行研究により、若手教員（本研究では採用 5 年目以内）の授業実践における課題について整理、考察した。特に小学校教員において、指導が難しいとされる国語科の指導に焦点を当てた。

次に、先行研究や各教育委員会等の若手教員の実践的力量向上に関する取り組みを概観した。国語科の授業デザインにおいて、①教材解釈と②学習指導要領の理解と指導への反映の項目の力量不足が大きく、授業実践に影響を及ぼしていることが明らかになった。

そこで、若手教員の授業改善について３つの段階（Ⅰ授業準備段階　Ⅱ授業実践段階　Ⅲ授業省察段階）を規定し、自己 PDCA と共同 PDCA のサイクルのあり方について提言した。今後、より効果的な若手教員支援システムの構築をはかるため、検証と考察を行う計画である。